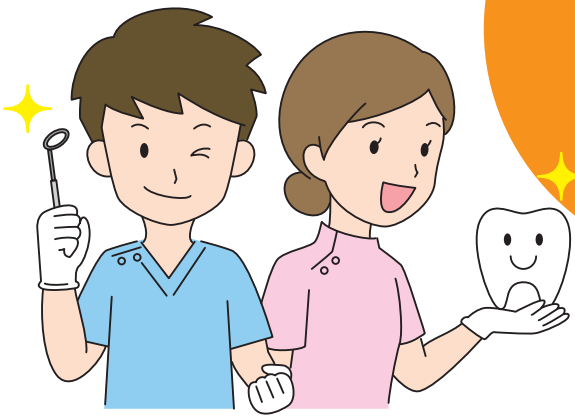
歯科臨床 まずはここから！

問診・資料採得

卒後５年を支える
スタートガイド



医歯薬出版株式会社

4. 資料採得の重要性

採得する資料は，患者の口腔内に現在見られるトラブルが起こってしまった原因を読み解くために重要なツールであり，どのように治療すれば改善できるのかを考える第一歩となる．

① 患者の現状を知る
② どのような経過をたどって現在の状況になったのか
③ その原因
④ どのように治療すれば，改善できるのか

資料は上記を理解するためのツールであり，診断に不可欠なものである．また，資料を改めて患者に提示して説明することで，現在の口腔内の状況を理解してもらい，問題点を共有し，その後の治療に対する理解を得ることが可能となる．

Point！ こんな時どうする？　問診時の困りごと

1．患者の話が長く，何を言っているか要領を得ない

基本的には聞き役に徹し，重要と思われるワードをメモしておこう．少し話が落ち着いてきた時に，こちらから具体的に痛みや腫れの程度や時期等，診断に関わる部分の確認を YES，NO 形式で行う．通常は患者が自由に話せるように開いた質問（オープンクエスチョン）をすることが多いが，話が脱線しやすい患者には逆効果になることもある．

2．問診なんていいから早く治療をしてほしいと文句を言う

問診を行わないと正確な診断ができず，誤った治療を行い症状が改善しない可能性を伝える．ただし，この発言がある時点で要注意人物であり，理解が得られない場合には治療を断ることも考慮する必要がある．

6．資料採得の方法，読み方① 口腔内写真

口腔内写真は口腔内の視覚的な情報を継時的に保存でき，患者への説明や治療後の再評価，メインテナンスを行うにあたり不可欠なものである．一方患者にとっては決して心地いいものでは無いため，必要性を十分に理解していただいた上で，素早く的確に撮影することが大切である．下記にルーティンで撮影しているアングルを示す（**図 1**）．

① 正面観（咬頭嵌合位）
② わずかな開口
③ 咬合面観
④ 側方面観（側方運動時）
⑤ 側方面観（咬頭嵌合位）
⑥ カップリング（咬頭嵌合位）

図 1　ルーティンで撮影している口腔内写真

Point！ こんな時どうする？　口腔内撮影時の困りごと

1．アシスタントがいなくて，術者一人で撮影しなくてはならない

患者に口角鉤を持ってもらうが，その際に口の中の空間を広げるイメージで，真横ではなく斜め前方に引っ張ってもらうことがポイントである．

2．患者の口が大きく開かない

特に咬合面の撮影で困ることがあるが，軽い開口時にカメラアングルをある程度決めておき，一瞬だけ大開口してもらい，その瞬間に撮影する．本当に開かない場合は，23 頁 **図 15** のように実像が写り込むこともあるが，それでも第二大臼歯までは撮影したい．

3．唇が痛いと文句を言い，非協力的な患者

口内炎がある場合を除いて，口角鉤は正しい角度で使用すれば，痛みは感じない．ミラーの当たりが強い場合は小さなミラーに変更したり，素早く撮影するように心掛ける．撮影後に労いの声掛けも忘れずに！　それでも協力的でない場合は，この先の信頼関係は得られにくいため，応急処置に留める．

4．嘔吐反射がひどく，撮影が困難

ミラーを小さいものに変更したり，キシロカインスプレーを塗布し，嘔吐反射を抑制して撮影することもある．印象採得時も同様である．

7．資料採得の方法，読み方
② パノラマ X 線写真

1．特徴

① 歯のみならず上顎洞，顎関節や下顎骨まで全体像を大まかに診ることができる（**図 1 ～ 3**）
② 定期的に撮影することで，治療効果や継時的変化を記録，診査できる
③ デジタル化により患者の被曝線量は大幅に減少したとは言え，不要時にむやみに撮影することは避ける
④ 断層撮影であり特に前歯部の像がぼけやすいため，1 歯 1 歯を精査するためにはデンタル X 線写真（後述）が不可欠である

2．読み取るべき項目

① 左右の対称性
② 下顎頭や下顎角の形態
③ 下歯槽神経の走行状態
④ 鼻腔，上顎洞の形態，炎症の有無
⑤ 過剰歯，埋伏歯の有無
⑥ 欠損部位や補綴歯の位置，本数
⑦ 顎骨内の異常な透過像（骨内病変）
⑧ 骨の垂直的な量や硬化度
⑨ 先天性欠損の有無
⑩ 後続永久歯の歯軸や歯根の完成度（混合歯列期）

図 1　パノラマ X 線写真（正常像）

12．口腔内を診て，治療計画の立案に必要な資料を考えてみよう！

実際の臨床では問診を行い，口腔内を確認した後に確定診断をする上でどの資料が必要かを常に考えなければならない．本項では 2 つの症例を提示するので，初診時の口腔内写真を見て，治療計画に必要な資料を考えてみよう．

症例① 7 歳，男児．歯並びが気になる

口腔内を確認すると，正中離開が認められる（**図 1**）．この患者（母親）に現状を説明するために必要な資料を考えてみよう．

図 1　初診時の口腔内写真